

ロザリンド・ギル (Rosalind Gill) : 沈黙を破る—新自由主義化する大学の“隠された傷”

[翻訳] 児 島 功 和
竹 端 寛

* [] 内の文は訳者による補足である。

はじめに

「元気？」

「正直、今ストレスがすごい。仕事の洪水に溺れそう。『研究過程における秘密と沈黙 [Secrecy and Silence in the Research Process]』の1章分を担当しているけど、ずっと取り掛かれていない [本稿のこと]。[編者の] ロイシーン [Róisín] をがっかりさせてしまうのは、本当に申し訳ないと思っているし、今から始めても遅いくらいだけど、とにかく時間がない。」

「わかる。そういう時ってある。」

「昨日は『要返信』のメールが115通もあって、仕事を片付けるために一日16時間も働いてるのに、いつも何かが遅れているんじゃないかと焦っている。タスクを片付けるよりも速く TO DO リストがどんどん長くなっていく。数時間で成長するホラー映画のキノコみたいに！（笑）自分自身の執筆をする余裕なんて、まったく、全然、ない。睡眠の質も悪いし、もうめ

ちやくちや……。」

「こっちも同じ。本をちゃんと読む？物事を深く考える？無理無理、そんな時間ない。もう本当につらい。子どもとの時間も、しょっちゅう犠牲にしていると感じる。一緒にモノポリーや何かで遊んでいる時も、ちやくちよく抜けてはメールやメッセージのチェック。うんざりしてもう辞めたくなる時がある。」

「同感。状況は悪くなる一方だし、宝くじに当たらないかなってまだ思ってる（笑）。」

「あなたはどうか？」

「本気で知りたい？」「(笑いながら) もちろん！」「もうね、やってられない。実は、昨日ある査読付ジャーナルに投稿した論文が掲載拒否されたって連絡が来て……。」「うわあ……。」「知ってるよね、私が何年も何年も頑張ってきたあの論文。あれを書くためにどれだけエネルギーを注いできたか。」「知ってる。」「ある査読者のコメントが特に酷かった。『この著者よりも勤務校の大学1年生の方が、この分野に関する適切な理解をしているだろう。こんな論文を読まなければいけないなんて時間の無駄だ。』このコメントを読んだときはね、ロス [筆者の愛称]、顔をひっぱたかれたようなショックを受けた。手紙を読んだ郵便室で泣き出さないようにするだけで必死だった。すぐ後に授業だったから必死でこらえて、何とかこなしただけ、昨夜は眠れなかった。」「それはつらいね。」「頭のなかではネガティブなコメントがぐるぐる。最悪なのは、そのコメントが正しいってこと。私は実際、役立たずで——。」「それはないって。」「——まがいのので、ト

ップジャーナルに投稿したら、それがばれてしまうことに気づくべきだった。」

これは、本稿の執筆に（やっと）とりかかる数日前に友人の女性研究者と話した内容を書き起こしたものである。二人とも白人で、イギリスの伝統校で（1992年以前に設立された大学）、継続雇用契約 [continuing contracts いわゆる無期雇用に相当すると思われる] の職に就いている——現代の学術界において、二人の立場は「特権的」ともいえる。二人のどちらが私の発言か、原稿執筆が進まないことに対する嘆きから容易にわかるだろう。会話の一部を読んでピンとこない読者もいるだろうが、それ以上に共感してくれて、深く理解できると感じる読者も多いのではないか。極度の疲労、ストレス、過重労働、不眠、不安、自己否定、罪悪感、所在のなさ、攻撃的になること、傷つけられること、「自分はホンモノじゃない」という感覚、またそのことが明るみになる恐怖。この会話には昨今の学術界に蔓延しているこれらの状況や感情が凝縮されている。こういった感情や感情的な体験は、まさに「秘密と沈黙」[本稿の掲載書籍タイトル Secrecy and Silence in the Research Process] の裏側でひっそりとうごめいている。実際には日常的で、ありふれた問題だ。しかし、学術界では公然の秘密とされ、皆が沈黙を強いられている。廊下でのおしゃべり、コーヒー休憩中の会話、友人同士のやりとりでは、よくある話題だが、基調講演やジャーナル掲載論文、あるいは学内会議でさえ、こうした話題は取りあげられない。ここ数十年、学術界では再帰性に注目が集まってきたが、「研究者自身」の経験はほとんど批判的に検討されなかった。あたかも再帰性は個々の研究の中でだけ考えることで、学術的知識を生み出す当事者たちの構造的・制度的環境については、疑う余地がないかのようだ。

研究者的な目線を、自分たちの労働状況や組織統治、そして生産過程に

向けるとどうなるだろうか。他人を研究する代わりに自分たちの研究者コミュニティに目を向けたら？洗練された出版物や綺麗に飾られた会話ではなく、私たちが日々しばしば不本意な形で埋め込まれている、終わりが見えない業務上のやりとりや作業に関するデータを取ると、何がわかるだろう。例えば、増え続けるメール、会議の議事録、求職書類、査読、昇格審査、研究評価制度 [RAE]¹⁾のための草稿、委員会書類、学生へのフィードバックや授業後の質問・雑談対応等々。大きな組織と制度的慣行、個人的な経験と感情、これらをどのように結びつけて検討することができるだろうか。また、これらには、ジェンダー、人種、階級の問題も関わってくるであろう。複数の追いつめられた研究者が、「自分の仕事はゴミだ」「ニセモノだとばれそうだ」と吐露する現状を、私たちはどう批判的に分析できるだろうか——匿名化された査読過程（その実態はめったに検証されない）でしばしば見られる、根拠のない個人攻撃や残酷さについてもだ。そして、こうした感情と、欧米の大学における権力の新自由主義的实践とを、いかに結びつけられるだろうか。要するに、私たちの職場におけるこの公然の「秘密と沈黙」と、その様々な意味について、理解の入り口に立つにはどうすればいいのか。

この短い文章だけでは、上記全ての論点に触れることは出来ないだろう。しかし、まずはそれらを議論の俎上にのせることが重要であり、もっと言えばそれくらい緊急の課題であると感じている。これは自己陶醉やナルシシズムの発露ではなく、まして不平不満をぶちまける絶好の機会と考えているわけでもない——むしろ、上記会話例のような、様々な問題提起を含むコミュニケーションが、なぜ分析の対象とされず、(政治的な)改善要求へとつながる糸口にならないのか、単なる恨み言と受け止められているのか、それ自体も問題であり、興味深い。本稿は、経済的・政治的な時代の変化に対する、働き方の変容、個人の心理的・社会的経験の変容を、研

究者の労働問題を通じて分析しつつ、研究者の集成的「沈黙」と自分たちの職場を批判的に見られない態度を是正する試みであり、この状況にどう抵抗していけばよいかという対話の第一歩でもある。

経験を位置づける

この研究には四つの異なる先行研究があると思われる。第一に、豊富にある「労働の変容」についての研究だ。例えば、後期資本主義、ネットワーク社会、リキッドモダニティ、知識社会、ポストフォーディズムといった事柄について説明する社会理論である (Bauman, 2000; Beck, 2000; Hardt and Negri, 2000; Boltanski and Chiapello, 2005; Sennett, 2006)。そこで鍵とされているのは、リスク、個人化、不安定性に関するストレス、そして絶え間ない技術革新と再スキル化のニーズが発生する、技術革新のスピードに対するストレスである。つまり、マニユエル・カステル [Manuel Castells] が言うところの「再プログラム化できる労働者」になることの要請だ (1996)。最近関心が高まっている文化労働 [cultural labour] についての考察は、その中でも特に参考になる。なぜなら、この主題は、ウェブデザイン、テレビ、映画、ファッションといった文化産業における労働者を調査し、個人的経験の分析が多くされているからである。いくつかの研究によれば、この種の労働には下記のような特徴がよく見受けられる。一時的、断続的で不安定な仕事の比重が大きいこと、過密な長時間労働、仕事とプライベートの境目が無いこと、低賃金、流動性の高さ、仕事への情熱、(ウェブデザイナー、アーティスト、ファッションデザイナーなど) クリエイティブな職業人としてのアイデンティティに深い愛着があること、ボヘミアニズムと起業家精神が混在するマインドセット、インフォーマルな労働環境と特徴的な社交形式、仕事を探し、生計を立て、

急激に変化する業界のなかで「働き続けること」に根本的につきまとう、不確実性と不安の多さである (Ursell, 2000; Gill, 2002; McRobbie, 2003; Ross, 2003; Banks, 2007; Gill and Pratt, 2008)。こうした特徴は、昨今の欧米の大学の教員生活とも重なる点が多く、先行研究として非常に関連性が高そうだ。

第二の先行研究は、第一の領域よりはるかに量が少ないが、大学が企業化・民営化へ向かっていく傾向や、その影響に焦点をあてた、高等教育の構造変容に関する研究である (Graham, 2002; Washburn, 2003; Evans, 2005)。これらには大学への企業マネジメントモデルの導入が含まれる。教育をビジネスと経済的合理性という観点から再構築することである。学生の「消費者化」や、研究者の賃金の低下および労働条件の劣悪化などが、不安定雇用の増加に加えて生じているが、労働組合やその他団体による組織的抵抗は少ない。批判的研究は、「大学の営利企業化 [corporate university]」と「アカデミック・キャピタリズム」について取りあげ、市場の論理がどう高等教育を乗っ取ったかについて考察している (ただ批判的研究の全てがそのように考えているわけではないし、一部の批判は単にエリート主義的な価値観と学者が一種の紳士階級であった時代へのノスタルジーにすぎない)。

第三に、学術界内部における権力のマイクロ政治に関する知見もまたこのプロジェクトと関係が深い (Gillies and Lucey, 2007)。これらの研究は、しばしばフェミニスト的立場から、また時には精神分析的見地から「世俗からかけ離れた、論理的思考と洗練された文化が尊重される希少な世界」としての「象牙の塔」という学術界のイメージに異議を唱え、むしろ、現代の大学では、様々な場所で矛盾をはらんだ「権力の行使」があることを教えてくれる (同書)。権力は関係性の中で考察されるものだ。そして、これらの研究は、組織・制度的なものであれ、個人間のものであれ、無意

識のうちに生じる「権力の行使」に光を当てている。博士号取得過程における個別指導 [supervision] の力学から、仕事量や昇進に関する議論に至るまで、学術界における小規模で、ミクロな権力の駆け引きに注目している点は特に意義がある。

最後に、フーコーの影響を受けた新自由主義研究は、研究者の昨今の労働環境について考える上で有効な参照先と思われる。とりわけ、これらの研究を読み解くキーワードとして出てくる「強制された主体性 [compulsory individuality]」(Cronin, 2000) と「監査文化 [audit culture]」という概念は重要だ。前者は、個人が自らの人生を、あたかも熟考に基づく計画と選択の結果であるかのように語ることへの要請が、ますます強くなっていることを表している (Rose, 1990, Walkerdine et al., 2001)。後者は、全てのものが定量化可能な「アウトプット」として、他者にも分かりやすい・計測できる状態で、「監査可能なもの」になるよう強いられる風潮を意味する (Power, 1994, Strathern, 2000)。経済的合理性の議論を拡張することで、新自由主義についての批判的研究は、徐々にその姿を現してきた新しい「規範」を浮き彫りにしている。すなわち、責任感があり、たえず自分を観察・記録し、計画的で、優先順位付けが出来る、高度な自己管理の技術を持つ主体となることへの要請だ。現代の研究者には、まさにこういった能力が求められている。私たち研究者は、上からの管理をほとんど必要としない。雇用主からすれば、何かを強いるよりも、はるかに効果的な権力行使のやりかたで、私たちの高い自律性をただ利用すればよいわけだ。

これらの異なる先行研究を合わせれば、学術界における労働の変質について多くのことがわかるだろう。資本主義の変容、新しい組織運営の形態と大学で働くことの心理・社会的経験との関係を複合的に検討出来るように、上記の知見を組み合わせる必要がある。この試みのため、私は学術界

で働く研究者の経験の話から始めようと思う。それは、「適切なコミュニケーションのチャンネル」を持つことなく、秘密とされ、沈黙されてきた経験である。私の持っている「データ」は非科学的なものであるが、研究者の職場の現実を教えてくれる。それらは、友人・同僚との会話やメール、大学からの連絡事項、ジャーナル編集者からの手紙、その他1年にわたって収集された日々の「断片」から構成されている（私のものを除いて匿名化されている）。私は、いわゆる理論から始めたり、資本主義や労働あるいは高等教育の変化に関する説明から議論を始めるよりも、こういった日常経験の話から始めたい。なぜなら——特にフェミニズム分野で、こういった「個人的経験」をめぐる論争が数多あるにも関わらず——大半の議論の場で、個人的経験に基づくデータは沈黙を強いられているように思われるからである。だが、背中の痛み、目の疲れ、睡眠障害、そしてストレスや不安、過重労働といった多様な経験こそが、この問題がたしかに存在し、「事実」であると物語っている。

不安定な生活

「誤解しないでほしい。私はこの仕事につけて本当に嬉しいんだ。だけど、契約期間が短いから今度もまたすぐに違う仕事を探さなければならぬ。」（初期キャリアにある30代、3度目の1年契約）

「実は、四つのアルバイトを掛け持ちしている。本当は三つのはずで、それならなんとかこなせるだろうと思った。でも、誰かがx（大学）で病欠になった代わりに、私に入ってほしいと依頼が来た。狂気の沙汰だとわかっているけれど、断るわけにはいかない。来年フルタイムの仕事を得る唯一のチャンスかもしれないから。だから熱意を見せてきっかけ

をつかみなかった。でも、正直、死にそうになっている。私の予定表を見てほしい。木曜日は仕事の掛け持ちで約400マイル [約644km] ほどの車移動があって、運転しているとすごくストレスが溜まる。ハンドルを握る手の関節も真っ白になって、渋滞か事故かなにかがあったら、何もかもめちゃくちゃになってしまうだろうと思っている。」(ポストクになったばかりの30代)

「私がこの論文を書きあげようと必死になっているのは、よい査読付きジャーナルに掲載されなければ、研究評価制度 [RAE] 対象から外れるという理由から。そんなことになれば、昇格の可能性なんか完全に吹っ飛んでしまう。おそらく私の任期切れも近い。教育専門職の契約になってしまう！指先一本で崖にぶら下がっているような気持ちだよ。」(講師・40代)

労働の不安定性は、(必ずしも若手だけとは限らないが) 特に若手あるいは初期キャリアと呼ばれる労働者の間で顕著な問題である (本来は若手層=初期キャリア層であったが、昇格や安定した雇用に結びつく求人があまりに少ないことから、近年ではこの「初期キャリア」が延長され、生涯一度も脱せない場合もありえる)。研究者の雇用に関する統計が示すのは、労働力の構造的な不安定化を伴う、この数十年間にわたる高等教育機関の大規模な変容である。継続契約は大学のポストの半分強しかなく、2006~2007年には高等教育の全研究者の38%が有期雇用だった (Court and Kinman, 2008)。過去、短期雇用契約といえば、多くは期間限定プロジェクトに関する研究職だったが、現在は給与水準が低く1年ごとに契約を更新する教育専門職の特徴にもなっている。しかし、このような立場でさえ、激増している時給制の非常勤講師職と比べれば、「労働貴族 [aris-

tocracy of labour]」と見なされる。なぜなら、講師としての訓練機会も乏しく、サポートも不十分な中で、現在多くの博士課程の学生や、ポストクになってまもない研究者が学士課程教育のプログラムや講義を低賃金で大量に提供する担い手になっているからだ。授業準備や採点の時間を考慮すると、最低賃金を実質下回ることも多く、賃金だけでいえば、清掃やケータリングの仕事が魅力的な選択肢に思えるほどの給与の低さである。このような仕事に加えて、大学経営のコスト削減手段の一環で「教育フェロウシップ」という新たな階層もある。それは、以前であれば「講師 [lecturer]」として働いていたような人を、より低い待遇で働かせるためのポストに事実上なっている。大学側は労働者に対する責任や義務を免除され、契約には年金などの福利厚生が含まれず、低収入で、授業期間ベースの報酬しかないため、往々にして学校が長期休みの間は無収入に陥ってしまう。

他にも、私たちが怒るべきことは山ほどある。歴代政府の高等教育政策、同僚の給与や労働条件の劣悪化に対し相対的に安定した地位の大学教員や職員たちにも連帯責任があること、そして研究教育職市場や、それどころか、大学業界全体の未来や、研究成果の「大虐殺」に対して、組織的な抵抗運動ができていないこと。加えて、もっと議論が必要なのは、この種的不安定性さや脆弱さを私たち研究者がどう「経験」しているかである。社会理論家ベック (Beck, 2000) が言うところの「すばらしい新世界の労働 [brave new world of work]」を、学術界の人々はどうのように経験したのか。比較的安定したものが多かった学術界の仕事が、低賃金・非正規・非連続的な雇用中心に移行してしまったことで、失ったものは何か。本文で引用した語りからは以下のような問題がうかがえる。例えば、長時間労働や、費用もかかり、肉体的にも疲れる長距離移動や、この仕事特有の不安定性さから、先の見通しが経たないことなどを理由とした、慢性的不安症やストレス。英国安全衛生庁の計算によれば、年間1,380万の労働日が仕

事関連のストレス、不安、鬱によって失われている。そして、英国の大学教職員組合 [University and College Union] が行った2008年のアンケート調査で、学者たちは「平均よりもとても高いレベルのストレス、やや高いレベルのストレスがある」と回答しており、その割合は1998年から2004年の結果に比べて増加している (Court & Kinman, 2008)。しかし、こういったことは、研究者の生活に多大な影響を与えているにもかかわらず、学術界ではほとんど語られない。語られたとしても、現代の学術界の構造的特徴としてより、個人的経験として扱われる傾向にある。さらに、研究者は彼らの(低い)報酬について話すのが苦手である。おそらくは話すことで研究や学術界への関わり方や誠実さが疑問視されるかもしれないと考えているのだろう。アンドリュー・ロス [Andrew Ross] (2000) は、研究者の仕事は「高貴な使命感から」するものという考え方が、研究者がお金の話を忌避することにつながっていると論じている。これはおそらく、何十年もの間インフレにあわせた給与交渉さえもおぼつかないことと無関係ではない。経済的困難は、研究者の教育・文化的な資本によって覆い隠され、語る事が難しいものとされてきたのだ。

大学で不安定な仕事をするに付随する個人的代償について研究者が沈黙してしまうのも、おそらくは学術界あるいは研究への「自己犠牲的」エートスがあるためであろう。極端な遠距離通勤をする必要があったり、仕事のためにパートナーや友人と離れた場所で生活したりすることなども、個人的代償の一例である。私たちの仕事はますます移動可能性が高まっており、断片化された労働力と化しているのだ。また、子どもを持たないこともよくある代償だ。このことは、学術界で働く男性と比べても、他職種の女性と比べても、こと女性研究者に偏って強い影響を与えている (Probert, 2005; Nakhaie, 2007)。この性別による違いは、子どもを望む女性研究者の相対的な少なさに起因するという説明もありうるが、次のよ

うな状況があることを忘れてはならない。多くの女性研究者が、安定した仕事につくまでの期間（学士、修士、博士、非正規雇用期間）が長すぎて子どもを持つには手遅れと感じていること、あるいは今日の大学での働き方では日々求められることが多すぎて、子育てに時間が割けないことを背景に、学術界のキャリアに就きながら子どもを持つのは非常に困難と感じていることである。カリフォルニア大学の研究によると、大学での労働時間に家事と育児の時間を加えると、女性研究者は週100時間働いているという（Mason et al., 2006）。ここ30年で大学の研究職に女性が急速に参入してきたが、一部の女性にとってそれは、家族形成を諦めることによって達成されてきたのだ。このことは、性差別解消に向かっている傾向が全体としてはありながら、より複雑さを増した形で差別や不平等が明らかになっている他の職業分野（例：ジャーナリズム業界）での状況にも通じる。

ファストアカデミア：多忙化と労働内容の拡張

「注意：オンラインフォームに記入する際は、週あたり37時間を超える合計時間数を入力しないでください。入力するとフォームが無効になります。37時間以上働いた場合は、回答を労働時間数ではなく労働時間を% [百分率] で記入してください。^[2]」（スタッフへの業務管理 [TRAC] フォーム入力に関するガイダンス・2007年 X 大学）

「もうちょっとした中毒というか、強迫神経症になっているというべきか。いつも何か予定を忘れていないのではないかと心配になる。一日メールを見ないと次にメールソフトを開けたときに60～70通のメールを一気に受け取ることになるのでと不安になる。そういう意味で、私のメール対応は底なし沼で、終わりががない。私の To Do リストも同じ。To Do

リストを70個から30個に減らしても、また新たに30個のタスクが来ていて、永遠に30個以下にはならない。」(61歳男性教授・Gregg 2009からの引用)

まるで懲役のような激務は、もはや学界の風土病ともいえる。繰り返しになるが、この問題について真剣な議論を大学内外で見つけることは困難である。だが、研究者と少しでも一緒に時間を過ごしてみれば、専門職の働きすぎは限界点に達しているという印象をすぐさま得ることができるだろう。なぜなら、この20年間、資金不足のまま大学が拡張し、研究者に求められることが恐ろしいほど増大し、「監査文化」に染まったからである。しかも、以前なら疑問の声も上がったであろう監査文化を、今の大学の教職員たちはほとんど完璧に内面化してしまっている(実際私がこれを書いているときにも、「新しい研究評価制度 [REF] へ対応する準備が必要」という内容のメールを受け取った。だが、それは Research Excellence Framework [REF]^[3]と呼ばれる新しい研究評価制度の詳細要件が発表すらされる前だった)。

研究者の多忙化は、個々人の逸話(ほとんどの研究者が大量の逸話を供給できる)だけでなく、既存の労働時間に関する研究によっても明らかにされている。英国労働組合会議による2005年の調査結果(Court and Kinman, 2008から引用)によると、研究者と教師は、無給で残業をする傾向が他のどの職業よりも強いことがわかった。大部分は欧州労働時間指令 [European Working Time Directive] を超える労働時間であり、42%の人々が、業務量に対して必要な作業時間を工面するため定期的に夜間や週末も働いていると回答した。理由はとても単純で、求められる仕事量が多すぎるからだ。これは「公然の秘密」とされる。実際に大学の運営側もこの「公然の秘密」を認識していることが、労務管理のシステムにも表れ

ている（前述の事例参照）。つまり、業務管理システムのソフトウェア上でも、（時間外労働の常態化している）研究者の労働時間を記録することがシステムの前提となっている。システムの記録上の労働時間は短縮され、労務管理側が実際の労働時間を把握できないようになっている。このようにして、研究者の労働時間は制度的に、かつ、きわめて作為的に見えなくされており、沈黙を強制する構造になっている。

もちろん他にも、私たちの不満を抑え、抵抗を無力化するためのあらゆる巧妙で有害な仕掛けが存在する。それらは研究者が研究対象とする題材の中だけでなく、研究者自身の「同僚」関係のマイクロレベルでも暗躍している。ある女性講師は次のように話している。

「もう限界だったから、仕事量について文句を言うためにメンターに会いに行った。知っていると思うけど、私はとっても一生懸命やっていた。でも、メンターは、こう言い捨てただけだった：『現代の学术界にようこそ。私たちはみな狂ったように働いている。乱暴な物言いかもしいないが、あなたは何をすべきか知っているはずだ。つまり、【暑さに耐えられなければ台所を出て行け】ということだ。』」

学术界の「台所」はほとんどの人にとっては暑すぎるようだが、このことは暑さを抑えようとする運動に結びつくのではなく、競争的な雰囲気、過熱に結びついてしまう。しかし、学术界の組織運営では、なぜかこのような競争的な環境にもかかわらず、優しさ、寛大さ、連帯を根拠としたやりとりが維持されているように見える。かつての大学講師にとっても、博士号の審査、論文の査読または奨学金審査などに協力することは、同じ学术界の「模範的市民」として求められる責任ではあった。しかし、査読誌の編集委員やコースの責任者が、このような必要不可欠な仕事を引き受け

られる人を探すことが大変になり、こういった業務への参加要請が、今ではますます嘆願めいたものになっている。これは、学术界全体の構造的な問題であり、多くの人々にとって自分の仕事だけでも業務量が多すぎるため、名指しで依頼された仕事以上のことを引き受ける「余力」[slack]がない状態になってしまった結果といえる。それにも関わらず、繰り返しになるが、こうしたことは制度的・組織的な問題として議論されていない。代わりに、大学側は個々の教職員がそうした状況に対応できるよう、「時間管理術」「速読術」「優先順位管理の技術」などに関する研修（しかし私たちにはそれを受講する時間もない）を雨あられのように提供することで「支援」している。大学教員たちがこれほどの仕事量をこなし続けている現在の状況の持続可能性を検討することは積極的に拒否する一方で、まるでそこにはテクニックで改善できる余地があるかのようにだ（なるほど！メールチェックは1日1回だけにすればいいのか。なんで今まで気づかなかったんだろう？これからはメールチェックを午後5時の1回だけにして、その日受信した115件のメールに徹夜で返信すればいいんだ！）。

これはきわめて皮肉な事態といえる。すでに研究者は自己管理の達人であり、これ以上、自己管理術の訓練をまったく必要としていないのだから！むしろ私たちは、日々の労働実践や（ブルデューの用語を私の心理・社会的関心にひきつけて用いるならば）心的ハビトゥス [psychic habitus] によって、自律的で、計画的で、思慮深く、責任感をもつ主体として、新自由主義社会の優等生になっている。新自由主義的な管理形態の「自由さ」「柔軟性」「自律性」は、より効果的に「剰余価値」を引き出すことが証明されている。あるいは、少なくとも、他の古い管理形態より大幅に労働時間を増大させることができる（その上、ご存知の通り、大学組織においては、こういった新自由主義的な構造と、従来の封建的な権力のあり方などが、なんら問題なく共存している）。

一方、私自身、自己管理ノウハウの研鑽や、こういった問題を個人の問題として解決することに対して批判的でありながらも、結局その場しのぎから抜け出せずにいる。例えば、以下は、私が査読コメントのような日々のタスクをどうこなしているか友人に尋ねてみた結果だ（私も、こういった事にどう対応すればいいかヒントを探していた）。「査読するのは編集委員会に所属しているジャーナルだけに絞っている」「毎年査読を20回やっているが、20回を超えたら断固拒否することになっている」「トピックを見て、それが自分自身の関心分野に非常に近い場合だけ査読をする」など。私は、このような検討に費やされる思考と感情労働の多さに驚きを覚えた。実に多くの異なる反応があり、個人的な戦略に基づいた注意深い考え方があり、授業をすること、学術界の良き「市民」であること、「生存」すること、それらのバランスをとるためにたくさんのエネルギーが費やされている——ここでいう「生存」とはつまり、大きな失敗をせず、病気にならず、自分の仕事を全て投げ出さずにやりくりすることだ。しかしこういったことは、学術界では美しい装いの下に「秘密」にされ、本当ならおおよそ対応しきれないような仕事量をなんとかこなすために、個人個人がそれぞれの方法で対処している。

そして、やった仕事だけでなく、やれなかった仕事によって生じる感情的なコストもまた見逃されている。ある同僚が、彼の担当している学生の博士号取得審査を私に頼んできたことがある。私は2日間悩みに悩んだ。彼女を助けたかったし、興味深いテーマだった。この仕事を引き受けることは倫理的にも政治的にも重要と感じられた。その学生が、私に審査を引き受けてほしいと心から思っていたことも知っていた。でもその月は他にも2人の博士号審査を引き受けており、何もかもが遅れていたし、母も病気で、もう限界だった。深呼吸をして「ごめんなさい、できません」と言う。すると、私の心はすぐに罪悪感でいっぱいになった。自分を少し卑し

く感じ、自分がなりたいたいような人間から少し遠のいたと感じた。私は、審査を断られたその学生が感じる失望について考えないようにしている。

常時接続：壁なき学術界

研究者の仕事は、その業務量が急激に増加しただけでなく、仕事をする「時間」と「空間」も著しく拡張していつている (Jarvis and Pratt, 2006)。皮肉なことに、「騒音開放型」のオープンオフィスは集中しづらく、仕事に何かと入る横やりや、学生からの様々な要望にに応じているうちに、「職場では仕事にならない」と悩み、むしろ、どこでもいいから大学以外の方が研究活動がはかどるのでは、とまで供べる教員が増えている。まったくもって「便利」なことである。独創的なマルクス主義の著述家たちは、このように労働が脱領域化し、利益を生むために、社会のあらゆる場所が「職場」になったこの資本主義の新しい段階を、「社会化された労働者」「壁のない工場」の時代と呼んでいる (Negri, 1989: 79)。同様に、今日の大学教職員の生活はいうなれば「壁なき学術界 [academia without walls]」となっている。複数の要因によってこのことはもたらされたが、どこにいても繋がれる「常時接続」の ICT がそれを促したのは間違いのない (Gregg, 2009)。

たえず加速するモバイル技術は、新自由主義化した学術界の主体の気質と心的ハビトゥス [psychic habitus] と相性がいい：研究者は、英国図書館であれ、ビーチやベッドの上からであれ、常にデバイスをチェックし、ファイルをダウンロードし、見逃している情報や対応漏れはないかと必死になる。グレッグ [Gregg] のデータ (オーストラリアのホワイトカラー労働者を対象としたインタビュー) と、私が同僚や友人と非公式に交わした会話には、注目すべき点が二つある。第一に、基底にある強烈な「不安

感」である：遅れをとること、重要な何かを見逃すこと、落ちぶれることへの不安である。第二に、繰り返しとなるが、こういった問題がほぼ完全に個人的な事象として位置付けられていることである。問題が価値観、感覚や考え方のせいになされ、不安症傾向のある個人の問題として捉えられており、対応不可能な業務量を押し付ける組織の問題として語られていないように見える。更には、こういった状況を当事者たちが病理学的な言葉で表現しがちなこと、またその背景に強い自己否定感があることは特筆に値する。「ファストアカデミア」の冒頭で、男性の大学教員が自らの様子を「中毒」「強迫神経症的」と描写していたが、不合理なほど多くの仕事をなんとか合理的に対処しようとしているだけ、という方がより正確ではないだろうか。「中毒」というメタファーは、研究者とメールの関係を語る時の常套句になっている。朝一番のメールチェックと夜寝る直前のメールチェックに対する義務感はもちろんのこと、病気や休暇などで職場を離れた場合、復帰した際には受信箱にどんなメールが待ち伏せしているかと思うと恐怖を感じるほど、「メールをチェックしないこと」に高いレベルの不安感を抱くのだ。さらにいえば、こういった不安感に対処するため、例えば実際にはオフィスにいるのに「外出中」と自動返信を設定するような、ちょっとした「裏技」も色々ある。

ただし、私たちの仕事が多忙化し、慢性的な高ストレス状態になったのは、メールの常時接続文化のせいだけではない。実際私たちがどれだけの時間をメールに費やしているのかを考えると、非常に矛盾しているが、しばしば、私たちは「メールのせいで『本当の仕事』にとりかかれぬ」という体験をしている。しかも、その『本当の仕事』自体も、最小の労力で最大の結果を求める効率化の要請、すなわちグレッグ [Gregg] (2009) が言うところの「ファンクション・クリープ [function creep]」によって、絶え間なく肥大している。教育業務で例をあげると、もはやただ講義をし

たり、ゼミを担当したりするだけでは不十分とされ、WebCT、Blackboard、Moodle といった新しいオンラインコミュニケーションプラットフォームで使用するための教材作成も私たちの業務として求められている。以下は、ある大学からの指導例である：「講義ノートをアップロードするだけでは不十分です」「小テスト、参考リンク集、視覚教材などを織り交ぜて、WebCT を“クリエイティブ” に使用することを推奨します。WebCT のポテンシャルを活かした斬新な授業のアイデアをもっと知りたい方は、ぜひ本学が提供する研修をご活用ください。」なんてすばらしい！こんな連絡をもらったら、また別の研修を受けることになってしまう！そんな風に、私なら不真面目な皮肉のひとつも考えたくなるだろう。もっとも、より創意工夫を凝らし、より新しい教育を、最先端のやり方で仕事を、などとたえず奨励されることで生じるプレッシャーは、受け入れざるを得ない。なぜなら、こういった傾向は、元々存在する「プロであること」と「良い仕事をしたい」という欲求と職業倫理を満たすものであるからだ。

しかし、ほとんどの場合、それ以上に研究者が最もプレッシャーを感じているのは研究に関することだ。私たち研究者の「価値」を査定するものとして、最も監査・評価されているのは研究であり、研究者は以前よりずっと厳しい目にさらされている。単に研究成果を発表できるかできないかだけでなく、何を発表するか、どこで発表するか、それがどの程度引用されるか、論文が掲載された雑誌にはどれだけ「インパクトファクター [引用数を指標とする影響力]」があるか、そして「REF の審査に適した研究者 [REF-ready]」であるかどうかの問題とされる。「ファストキャピタリズム」を発展させた概念である「ファストマネジメント」についてナイジェル・スリフト [Nigel Thrift] が書いた文章を読んだ時には、学术界との類似点に感銘を覚えた (Thrift, 2000)。私たちも、常に新たな論

文の締切、新たな助成金申請に適應し、関心が移ろいゆく利害関係者や研究成果の利用者に適合するために、これまで以上により早く、より機敏に、そしてスリフト [Thrift] が「一触即発の対応力 [hair trigger responsiveness]」と名付ける能力をともなう必要があるからだ。スリフトの言葉を借りれば、研究者はいつでも「常態化した緊急事態 [emergency as rule]」に対処する必要がある。これは、「あなたの評価は直近の仕事で決まる」[これまでがいくら良くても、一度悪い仕事をしたらその仕事で評価されてしまう] という考え方以上に人を追い詰める支配・統治の様式である (Blair, 2001)。学术界でのあなたの評価は直近の「論文」で決まり、しかもその評価が有効な期間は以前より短くなった。ようこそファストアカデミアへ！

心をむしばむ自己否定

「査読者 2：この論文は x (ジャーナルの名前) の読者には何の興味も持たれないだろう。言説分析はジャーナリズムと大差なく、政治過程の理解にいかなる貢献をするのかわからない。政治が『言説』 以上のものであることは、この著者を除く誰もがわかっていることだ。さらに、マーガレット・サッチャーの演説の分析を選んだ著者は、非常に地域限定的で視野が狭い。もし著者がこの種の『分析』を行ないたいのなら、少なくともジョージ・ブッシュの言説に当たるべきだ。」(ジャーナル掲載拒否に関する査読コメント)

「とても恥ずかしくて、職場の誰にも言えません。職場の人々が私に対して思っていることを証明してしまいますから。」(助成金取得に失敗し続けている40代の講師)

「一度は何とか耐えしのげたよ。でも、もう一度同じことを我慢できるだろうか。二度も昇進を却下された後で、今後も続けていけるかわからない。一生懸命あのポジションのために働いてきたが、自分がまるで無価値な存在と言われたように思える」(二度目の昇進申請が却下された50代の上級講師)

最初の引用は、1990年に私が初めて論文を査読付きジャーナルに投稿したときに受け取った査読コメントである。私はこの北米のジャーナルからの偏った視点に基づく非難に笑ってしまい(苦笑いだ)、アメリカに焦点をあてたら改善する!という提案が更に笑えた。しかし、それは小さな慰めにすぎない。なぜなら、何カ月もかけて考え、発展させ、注意深く積み上げてきた研究内容を、馬鹿にされ、拒絶されたことにより、私は侮辱され、傷つき、狼狽したからだ。恐らく私は学术界にとってまだ「不十分」な存在だった。初めて自分が「ちゃんとした」学術論文を書き上げた時には、楽観的な気持ちになり、また誇らしげな気持ちになったものだ。しかし、8か月後に掲載拒否の連絡がきたとき、あまりに落胆し、その論文をふたたび直視することさえ耐えがたくなってしまった。そして、その論文は今もお蔵入りしたままで、別の論文をジャーナルに投稿するまで数年間かかってしまった。

私も年を取り、経験を重ねることで少しだけタフになった。しかし、友人や博士課程の学生に同じようなことが起きるのを何度も見てきた。この章の冒頭で友人が述べているように、そのような手紙を開封した人が、困惑し、打ちのめされて泣いているのを何度も見た。しばしばそんな人たちを見ると、守ってあげたいと思うが、こういった状況に対して、私が出来るのは、彼ら・彼女らをなんとか準備させることくらいしかない。あるス

ロスビー [Throsby] という苗字の学生の言葉がある：「(ときに残酷で、人間としての尊厳を打ち砕かれるこのような体験は) 私が学界において『市民権』を獲得し、『スロスビー』になるための過程の一部である」^[4]。彼女は雄弁にそう語っていた。

このことは、少なくとも二つの疑問を生じさせる。第一に、なぜここまで敵対的で否定的な評価や値踏みが広い意味での研究仲間によってなされる状況になっているかである。20年近く前の私の論文に対する査読コメントは最近のものよりもはるかに穏やかで無害といえる。ジャーナルは査読過程を「開示」し、全ての査読を各査読者に送っているが、研究仲間の原稿に対して「これは自己満足のゴミだ」「引き出しにしまって、二度と出さないでほしい」などと書くことが一体いつから許容されるようになったのだろうか。これらは二つとも、私の同僚の昨年原稿に対して投げかけられた査読コメントである。このような慣例を生み出す心理・社会的プロセスとは何だろうか。私がここで論じたいのは、学問の自由や、考えに知的な相違があること、または学界で通常期待される忌憚のない議論などといった、当然担保されるべき性質のものではない。それは、新自由主義化した学界で顕著になってきた心をむしばむ状況についてである。それを理解するには、現在の学界におけるプレッシャー、競争、フラストレーションと、おそらく査読者自身も軽蔑され嘲笑された経験があることを、心理・社会的に総合して考える必要がある。査読コメントにおける攻撃性は、抑圧された怒りが、直接の原因ではない人物に対する攻撃として爆発した例ではないだろうか。あるいは、研究者が権力を行使できる数少ない場のひとつとして感じるからこそ、そうした攻撃性が発動されると理解できるのではないだろうか。そうして、匿名性が保証されたマントの下で、時に残酷に権力行使が「暴走」するのではないだろうか。

査読者コメントに関する二つ目の疑問は、否定的な査読の「受け手」に

とって、そのような掲載拒否（それ自体は研究者生活の中でごく普通で、日常的なことである）がすぐさま「心をむしばむ自己否定」とでもいうような感情に結びついてしまうことだ。ある意味では、私たちの多くが、これまでの人生でだいたいにおいて「苦労もあったが、うまくやってきた」（試験に合格し、称賛を受け、賞を受賞した）という成功体験ばかりに注目している結果かもしれない。勤勉で、モチベーションが高く、意欲的な主体である研究者は、新自由主義時代の完璧な申し子とも言える。逆に言えば、例えば「研究助成金を手に入れる5人に1人に入れなかった」「良いジャーナルに採用される15人に1人になれなかった」自分は「成功していない（あるいは十分に幸運ではない!）」と、誤認してしまう、あるいは、失敗の原因を自分自身や道徳的な態度の問題に求めてしまう心理傾向がある。

このような個人化された言説は、研究者を肉食のバクテリアのように貪り食い、そして有害物質を吐き出す。自己否定がそれである。「私はニセモノ」「私は役立たず」「私は何者にもなれない」というような気持ちだ。そのような自己認識は、様々なレベルで既得権益を持つ属性かそうでないか、つまりジェンダー、人種、出身階級その他の属性とも深く関連している。この感情的な反応は往々にして、秘められ、一人ひとり孤独に処理される。それ以外にどんな対処がありえるだろうか。私たちは「失敗した」という事実を人に知られた上に、不格好な姿まで晒したくない。そのため、掲載拒否されたことを誰に話すかは慎重になってしまう。パートナーには、言える。近い友人には、おそらく。しかし、(上記の引用が示しているように) 同僚が連带的というよりも敵対的で、競争的であると感じられたなら、言う必要はないと思うだろう。学生は査読付きジャーナルへの掲載が拒否されると、それにより生じるネガティブな感情を自分の中で処理する時間が必要となり、なかなか私に報告しないことがある。それは私にも

起こったことであり、私の知っている全ての研究者にも起こったことだと話をすると、学生たちは驚く。彼らはこの出来事を、すぐさま個人的な問題と捉えてしまい、恥ずべき失敗という認識で内面化してしまうからだ。自分たちは本当に実力不足で、だからうまくいかないと考える人もいる。他方で「解決案」を持っている人もいる。すなわち、もっと努力しなければならない、もっと幅広く読まなければならない、より適切に理論を理解しなければならない等々。「私たち」のようなよき新自由主義的主体にとっての「解決案」は、結局のところ「とにかくもっともっと頑張ること」なのだ。

喜び

上記のような体験は、まず、研究者にとって、仕事と仕事以外の人生・生活との境界があいまいなことが背景にある。更には、私たちが仕事に強い愛着を持ち、非常に多くの時間やエネルギーを捧げているという背景もある。そのため、研究者は仕事と自分自身の境界を見失ってしまいやすい。これらは後述するクリエイター業との明確な類似点である。例えば、アンジェラ・マクロビー [Angela McRobbie] はファッション産業などのクリエイティブ業界についてこのように述べている：

「本人が主張するところの仕事の楽しさと、自己表現を最大化する可能性があるような『私独自の仕事』 [my own work] と呼ばれるものへの情熱的な愛着が、現状を正当化する理由付けになっているだけでなく、そういった仕事を投げ出さないこと、不安定性と搾取されることを許容し、さらには非生産的にクリエイティブ業界に居続けることを許容する、規範的な心理メカニズムになっている。」

この鋭い分析は、「クリエイティブ業界」をそっくりそのまま「研究業界」に置き換えても非常に当てはまると確信している。研究者が仕事に見出すある種の「喜び」——あるいは、たとえ、現実の私たちがあまりにかけ離れていたとしても、少なくとも私たちが理想とする知識人像への深い憧れ——は、とめどなく増加する代償を伴いながら、私たちが新自由主義的な体制に閉じ込めている。そしてこの状況は私たちだけに起こっていることではない。したがって、私たちは、この現象がどのように起こっているかを早急に考える必要がある。例えば、ローレン・バーラント [Lauren Berlant] の「残酷な楽観主義」[cruel optimism] に関する研究は、一種の情熱や献身的な精神（ここでは理想的な研究者像への憧れ）が、いかに私たちが生き延びさせる力になりつつも、同時に事態を悪化させてきたかについての参考になるだろう¹⁾。

結論

本稿では、大学で働くことに関わるいくつかの「秘密と沈黙」について述べてきた。研究者の働き方はまさに新自由主義化した労働環境の一例であり、常に自己監視し、柔軟性や創造性を洗練させ、新しい形式の監査と数値化制度を内面化している研究者は、多くの点で新自由主義に最適化した主体だと論じてきた。

元々研究者たちは、努力家であり要求にきちんと応える傾向がある。自律的で、自らを動機づけ、自ら責任を負う主体をよしとする新自由主義的な体制とは相性が良いため、このような状況が深く学術界にも浸透していった。残念ながら、この短い文章では言及することができなかったが、この問題は、当然ながら、ジェンダー、人種、階級とも深く絡み合っており、そういった視点からも今すぐ議論されるべきである。大学の新自由主義化

に対する抵抗があまり出てこない理由は、上述のように研究者たちが分断され、個々人それぞれが問題に対処していること、沈黙を促す構造があること、さらには、実際問題、研究者が日々疲れ果てていて、何に対してどう抵抗したらよいか分からないことなどが挙げられる。また、おそらく、多くの研究者が、(仕事をする満足な時間さえあれば) この仕事に固有のやりがいや喜びを見出していること、古き良き学者像を内面化しており(あるいはそんな理想が実在しないとしても) いつかはそうになりたいという憧れを捨てきれないこと、(企業的な働き方モデルが大学に持ち込まれ、メール返信は24時間以内、週5出勤などの実施が求められ、そんな自由は猛スピードで崩れつつあるが) 比較的「自由な働き方」の魅力などを理由に、抵抗が生まれにくいことも理解できる。現実には元々あるかないか分からなかったような私たち研究者の公私の区切りは往々にして消失し、研究者が誇っていた「自由な働き方」は名ばかりになり、大学側が教職員を働かせ放題にできる「自由」になっている。

本稿は、研究者の経験に焦点をあてることで、その代償についていくつか述べてきた。特に仕事の不安定性、ストレス、不安感、自己否定に関する事例に注目してとりあげた²⁾。この「常態化した緊急事態」(Thrift, 2000)の世界において、こういった問題は新自由主義化した大学の労働環境における秘密、沈黙、隠された傷の一部である。私たちはどうやって抵抗を始められるか、それが今後の課題である。

あとがき

本稿をなかなか書くことができなかった。理由の一つは、これまで述べてきたような仕事状況のせいでもある。しかし、それだけではなく、執筆を迷わせる「内心のジレンマ」もあった。このような文章を書くことは、

ナルシシスティックであり自己憐憫的と受け取られるのではないか、という不安だ。世界のほとんどの人々に比べれば、私たちはあまりに特権的な立場におり、(イギリスの) 研究者人生における「傷」など、指摘することさえ下品ではないかという気持ちもあった。ケイト・ソーパー [Kate Soper] (1991) が別の文脈で書いていたように、「誰もあなたを飢えさせたり、拷問したりしない。地下鉄に乗ってポストモダニズムに関する会議に出席する自由さえもある」。そんな私たちに、職場の問題点を語る権利があるだろうか？ まるまる一章分のページを割き、「あたかも私たちが本物の問題を抱えているかのように」振る舞う権利はあるだろうか？！これを書いている時は、おりしもイスラエルがガザ地区住民を容赦なく爆撃した2009年1月であり、さらにこの懸念の思いを強くした。その時期、本稿の執筆を進めていない時間、私はロンドンにあるイスラエル大使館の外でデモをするか、日々画面の中で何千、何万ものパレスチナの人々の悲惨な苦しみを見ては、自身の無力さに涙していたかのどちらかであった。政治的な活動に取り組み、批判的である知識人の目から見て、そういった状況と比べると、学術界の新自由主義化の代償について書くことは、意味があることなのか、疑問に思えた……。

しかし、それではまるで、極端な不正や受難の話しかしてはいけないということになってしまう。「もっと悪い状況の人もある」という言葉で一切の批判の権利を奪い、私たち自身の経験を語れなくしてしまうことは、新たな沈黙を強いるダイナミクスになりうる。結局、私は書くことに決めた。発展途上ではあるが、このような新自由主義の心理社会的側面についての検討が、今日の「権力の様態」[modalities of power] を明らかにするという、より大きな研究課題にいずれつながっていくことを願っている。そして、最終的には、もがきながらも、世界がより良く、より公正なものへと進む道への一助になれば幸いだ。

謝辞

大学教職員組合 [University and College Union] のスティーブン・コート [Stephen Court] は、学术界の雇用や職場ストレスに関する統計データを入手するうえで貴重な支援をしてくれた。心から感謝したい。また、何人かの友人や同僚からもらった意見とフィードバックにも感謝したい。マーク・バンクス [Mark Banks]、サラ・ブラッグ [Sara Bragg]、キャシー・デイヴィス [Kathy Davis]、ナタリー・フェントン [Natalie Fenton]、ブレダ・グレイ [Breda Gray]、メリッサ・グレッグ [Melissa Gregg]、クレア・ヘミングス [Clare Hemmings]、ゲイル・ルイス [Gail Lewis]、アンジェラ・マクロビー [Angela McRobbie]、アンディ・プラット [Andy Pratt]、ロイシーン・ライアン・フラッド [Róisín Ryan Flood]、クリスティーナ・シャーフ [Christina Scharff]、ステファニー・テイラー [Stephanie Taylor]、イモーゲン・タイラー [Imogen Tyler] の各氏には感謝している。そして、研究生活に関する機知と知恵を与えてくれ、数年に渡って私を刺激し、勇気づけてくれた貴重な話し相手であるブルーナ・スー [Bruna Seu] には特に深く感謝する。

原著者注

- 1) このことに注意が向いたのは、クレア・ヘミングス [Clare Hemmings] のおかげである。感謝したい。
- 2) しかしながら私はまた、病気についても言及すべきだったかもしれない。なぜなら、私たち研究者は、疾病率も死亡率もどんどん悪化しており、同業者たちは「しょっちゅう病気している」と述べているからだ。

訳者注

- 【1】イギリスにおいて大学の研究活動向け運営費交付金を傾斜配分するための評価制度 参考：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/11/13/1328060_1_5.pdf (2020年9月10日確認)

- [2] システムの詳細が不明瞭であったため、著者に確認したところ、総労働時間が37時間を超過する場合でも、38時間や40時間とは記入できず、最大で37時間ある労働時間の中から「20%を事務、30%を研究、50%を教育業務に使った」というように、37時間を割り振る形でしか入力できない仕様になっているシステムとのこと。
- [3] REF については、次を参考のこと。https://www.ref.ac.uk/ (2020年9月10日確認)
- [4] 一人前の研究者として認められれば、一般人として下の名前やフルネームで呼ばれる存在から、苗字で引用されるようになる機会が増えるため、一人前になることを「スロスビーになる」と表現している。

文献

- Banks, M. (2007) *The Politics of Cultural Work*, Basingstoke/ New York, Palgrave Macmillan.
- Bauman, Z. (2000) *Liquid Modernity*, Cambridge, Polity Press. (邦訳：ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティー—液状化する社会』森田典正訳、大月書店、2001年)
- Beck, U. (2000) *The Brave New World of Work*, Cambridge, Polity Press.
- Blair, H. (2001) "You're only as good as your last job": the labour process and labour market in the British film industry. *Work, Employment and Society*, 15, 149-69.
- Boltanski, L. & Chiapello, E. (2005) *The New Spirit of Capitalism*, London/New York, Verso. (邦訳：リュック・ボルトンスキー+エヴ・シャベロ『資本主義の新たな精神 上』三浦直希・海老塚明・川野英二他訳、ナカニシヤ出版、2013年、『資本主義の新たな精神 下』三浦直希・海老塚明・川野英二他訳、ナカニシヤ出版、2013年)
- Castells, M. (1996) *The Rise of the Network Society*, Cambridge, MA, Blackwell.
- Court, S. & Kinman, G. (2008) 'Tackling Stress in Higher Education'. London, University and College Union.
- Cronin, A. (2000) Consumerism and compulsory individuality: women, will and potential. in Ahmed, S., Kilby, J., Lury, C., McNeil, M. and Skeggs, B. (eds.) *Transformations: Thinking through feminism*. London, Routledge.
- Evans, M. (2005) *Killing Thinking: The Death of the University*, London, Continuum.
- Gill, R. (2002) Cool, creative and egalitarian? Exploring gender in project-based new media work in Europe. *Information, Communication & Society*, 5, 70-89.
- Gill, R. and Pratt, A. (2008) In the social factory? Immaterial labour, precariousness

- and cultural work. *Theory, Culture and Society*, 25, 1-30.
- Gillies, V. and Lucey, H. (eds.) (2007) *Power, Knowledge and the Academy: The Institutional is Political*, Basingstoke/New York, Palgrave Macmillan.
- Graham, G. (2002) *Universities: The Recovery of an Idea*, Exeter, Imprint Academic.
- Gregg, M. (2009) Function creep: communication technologies and anticipatory labour in the information workplace. *New Media and Society*.
- Hardt, M. and Negri, T. (2000) *Empire*, Cambridge, MA, Harvard University Press.
(邦訳：アントニオ・ネグリ+マイケル・ハート 『<帝国>—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦他訳、以文社、2003年)
- Jarvis, H. and Pratt, A. (2006) Bringing it all back home: the extensification and "overflowing" of work: the case of San Francisco's new media households. *Geoforum*, 37, 331-39.
- Mason, M. A., Goulden, M. & Wolfinger, N. H. (2006) Babies matter: Pushing the gender equity revolution forward. IN Bracken, S., Allen, J. K. and Dean, D. R. (eds.) *The Balancing Act: Gendered Perspectives in Faculty Roles and Work Lives*. Sterling, Virginia, Stylus Publishing.
- McRobbie, A. (2008) 'Be Creative' Unpublished paper delivered at Barcelona Museum of Contemporary Art. November.
- McRobbie, A. (2003) Club to Company. *Cultural Studies*, 16, 516-31.
- Nakhaie, M. R. (2007) Universalism, ascription and academic rank: Canadian professors 1987-2000. *Canadian Review of Sociology and Anthropology*, 44, 361-86.
- Negri, T. (1989) *The Politics of Subversion: A Manifesto for the 21st Century*, Cambridge, Polity Press. (邦訳：アントニオ・ネグリ 『転覆の政治学—21世紀へ向けての宣言』小倉利丸訳、現代企画室、1999年)
- Power, M. (1994) 'The Audit Explosion'. London, DEMOS.
- Probert, B. (2005) "I just couldn't fit in": Gender and unequal outcomes in academic careers. *Gender, Work and Organization*, 12, 50-72.
- Rose, N. (1990) *Governing the soul: the shaping of the private self*, London ; New York, Routledge. (邦訳：ニコラス・ローズ 『魂を統治する—私的な自己の形成』堀内進之介・神代健彦監訳、以文社、2016年)
- Ross, A. (2000) The Mental Labour Problem. *Social Text*, 63, 1-32.
- Ross, A. (2003) *No Collar: The Humane Workplace and its Hidden Costs*, New York, Basic Books.

- Sennett, R. (2006) *The Culture of the New Capitalism*, New Haven, CT, Yale University Press. (邦訳：リチャード・セネット『不安な経済／漂流する個人—新しい資本主義の労働・消費文化』森田典正訳、大月書店、2008年)
- Soper, K. (1991) Postmodernism, subjectivity and the question of value. *New Left Review*, 186, 120–28.
- Strathern, M. (2000) The tyranny of transparency. *British Educational Research Journal*, 26, 309–21.
- Thrift, N. (2000) Performing cultures in the new economy. *Annals of the Association of American Geographers*, 90, 674–92.
- Ursell, G. (2000) Television production: issues of exploitation, commodification and subjectivity in UK television markets. *Media, Culture and Society*, 22, 805–25.
- Walkerdine, V., Lucey, H. and Melody, J. (2001) *Growing up girl : psychosocial explorations of gender and class*, Basingstoke, Palgrave.
- Washburn, J. (2003) *University, Inc. The Corporate Corruption of Higher Education*, New York, Basic Books.

【訳者解説】

[児島功和]

本稿は、ロザリンド・ギル [Rosalind Gill] 「Breaking the silence: The hidden injuries of neoliberal university」という論文の全訳となる。この論文は、ギル教授が編者を務めた『Secrecy and Silence in the Research Process: Feminist Reflections』(Routledge, 2010) に収められている。私が教授にメールで連絡をとり、翻訳許可をいただいた。また、こちらからの質問にも丁寧にお答えいただいた。心より感謝申し上げます。

この論文を訳出した理由は、イギリスの大学で働く研究者の問題の多くが日本の大学で働く研究者にも当てはまると考えたからである。本稿が焦点をあてるのは、研究者としての大学教員の経験や感情である。例えば、次のような経験は多くの研究者に思いあたるところがあるはずだ。職場だ

けではなく自宅やカフェで土日祝日関係なく仕事のメールをする、時には布団の中でも仕事のメールをスマートフォンでチェック、査読付きジャーナルに投稿して掲載拒否されることやそれに伴う強い否定的感情、会議資料の作成や授業準備が終わったのが深夜であったとしても、「さて、ようやく研究ができる」とばかりに睡眠時間を削って早朝にかけて研究、疲れ果てているのに土日開催の学会に参加して報告など。大学で働く多くの研究者が同じような経験をしていると思われるが、こうしたことは研究者の「個人的なこと」とされ、高等教育研究では大きな関心を集めることはなかった。

しかし、多くの研究者がこのことに関心がないわけではないはずだ。一般化には慎重であるべきだが、私の経験からも、例えば職場や研究会で研究者が集まると「仕事の忙しさ」の話になり、「いつどうやって研究をしているのか」という話題になることも多い。特に私を含む小さな子どもの親でもある研究者同士で話をする、研究するためのまとまった時間が取れないこと、そうした時間が出来たとしても仕事や家事・育児等で疲れ果てて集中できないといった話題になることがとても多い。国立大学で働く友人は子どもを寝かしつけたあと、パートナーに子どものケアをお願いし、自分は深夜も営業しているファミレスに行き、そこで博士論文を執筆したと教えてくれた。任期なし(無期雇用)の教員になかなかないという悩みも求職中の知人から定期的に聞いている。私自身任期なし教員になったのは40歳を過ぎてからだ。何度も公募に出し、何度も「お祈り」されてきた。「この仕事は自分には向いていない」と思ったことも数えきれない。

もちろんこの論文でも示されているように、研究者の経験にも様々な差異がある。人文社会科学系学協会男女共同参画推進連絡会による調査結果報告書『人文社会科学系研究者の男女共同参画実態調査(第1回)』の一

部を見てみよう¹。「第4章 時間のジェンダー差 (本田由紀)」「第5章 研究者たちの家族事情にみるジェンダー構造 (中西祐子)」では、次のように書かれている。「一定の地位を得たキャリアの後半においても、研究と授業以外の事柄に要する時間の負荷が女性に偏っているため、男性と比べて十分な研究時間が確保しにくい状況に置かれていることが見いだされた」(p.58)、「女性研究者は男性研究者に比べてシングル状態(無配偶者状態)の者が多い。これは婚姻歴がない未婚の者が男性より多いだけでなく、結婚後に離別・死別を経験した者が男性よりも女性に多いことが背景にある。日本社会全体では50歳時未婚率(旧「生涯未婚率」)は男性の方が高いことが知られているにもかかわらず、研究者の50歳時未婚率は女性の方が高かった。現職の任期の有無と婚姻状態の関係性を見ると、男性の場合は無期の仕事を手にすることが既婚率を上昇させていたが、女性の場合はその逆であった」(p.80)、「『子どもを持つ』ことは、男女の研究者に全く異なる現実を突きつける。女性にとってそれは、本人が研究者であろうと、専業主婦であろうと、育児の第一責任者としての任務を引き受けることと同義であった。他方、男性の場合、自らは育児に全くかわらなくても自身の子どもを持つことが多くの場合可能となっていた」(p.81)。現在任期なし雇用の専任教員として働く訳者の二人にとっての目下の悩みは、仕事と家事・育児のなかでいかに研究時間を捻出するか、また子どものケアを婚姻関係にあるパートナーとどう分担するかということである。祝日に授業があるとき、あるいは土日祝日に学会や研究会があるとき、私たちはパートナーに子どもを見てもらう「仕事」を任せている。こう書きながら「以前に比べて学会大会も行かなくなった」と自分やパートナーに言い訳をしたくなるが、こうした家事・育児をめぐる負担の不平等のもと、訳者は働き、研究をしている。なにより、私たちは任期なし専任教員として働きながらも子どもを持つことが出来ているのだ。しかし、上述の調査結

果が示すように、女性研究者の状況は異なる。子どもを持ちたいと願いながら仕事の事情で断念した女性の研究者やパートナーも研究者で自分も研究者だが、家事・育児の多くを担っているがゆえに思うように研究を進めることができない女性もいるだろう。非常勤講師を掛けもちして自身の生活を支えるのがやっとという研究者も少なくないはずだ。

ジェンダーや出身階層、雇用形態等によって、研究者の経験が異なるのも確かであろう。だが、いかなる立場であれ、新自由主義化する大学で働く多くの研究者が自身の苦しい経験や否定的感情をひとり抱え込みながら堪えているのではないだろうか。私たち研究者（繰り返すが、このカテゴリー内にも多様性はある）の多くは疲れ果てているのではないだろうか。そして、私たちはしんどさをひとりで処理することにあまりにも慣れてしまっているのではないか。私は、本稿がこうした状況を再考するための道具になることを望んでおり、また個人化する研究者同士を結びつけるメディアになってほしいと考えている。

最後になるが、ギル教授の略歴を紹介したい。ギル教授は、ロンドン大学シティ校 [City, University London] の教授であり、同校ウェブサイトには次の紹介文が掲載されている²。「ロザリンド・ギル教授は、エクセター [Exeter] 大学で社会学と心理学を学び、1991年にはラフバラ [Loughborough] 大学の言説・修辞研究グループ [the Discourse and Rhetoric Group (DARG)] で社会心理学の博士号を取得している。学際的な背景を持ち、社会学、ジェンダー研究、メディアとコミュニケーション研究を含む多くの分野で業績を残してきた。ロンドン大学ゴールドスミス校 [Goldsmiths] とキングス・カレッジ [King's College London] で活躍し、LSE ジェンダー研究所で10年働き、2013年にロンドン大学シティ校のメンバーとなった。」

注

1. https://824c8b1c-571f-457f-a288-600b039832e3.filesusr.com/ugd/5a0fef_e1e_48612dc2d478c97c71f9a336fed98.pdf (2020年3月21日確認)
2. <https://www.city.ac.uk/people/academics/rosalind-gill#profile=overview> (2020年3月13日確認)

追記：この訳文はもっと早い時期に投稿・刊行予定であったが、本稿作業中に新型コロナウイルス感染症が疑われる症状が出て、作業を継続することができず、締切りを過ぎてしまった。その後は授業をはじめ学内業務をするのに精一杯という状況になってずるずると作業が遅れ、この時期となってしまった。また、翻訳作業過程で、市川ヴィヴェカさん、小高えまさんに訳文のチェックをしていただいた。当然のことながら、誤訳等あれば、訳者の責任であるが、お二人のおかげでぐっと読みやすくなったと考えている。心より感謝申し上げます。

[竹端寛]

私は今、この原稿を祝日の夜、家事育児を終え、パートナーが子どもを寝かしつけた後に書いている。そして、これまでの私は、そのことに何の疑問も抱かなかった。子どもが小さくて家事育児を分担するなら、それも仕方ないだろう、と。そんな私は共訳者からこの論文の存在を教わり、一読して、頭を殴られる思いがした。

私自身が子育てをしながらも、研究や教育の仕事を「うまくやる」ために、「懸命に働く」。自らの裁量労働に喜びと誇りを持って、仕事と遊びの時間の区切りをつけずに、例え土日祝日でも、空いている時間があればこまめに文献をチェックし、子どもが寝ている間にメールの返信や仕事の続きにとりかかり、それでも時間が足りずに同世代の研究者が著作を出し続けるのを横目で見ながら、「自分は無能力だ」と落ち込む。よく考えれば、

公立中学校の1年生の時に、猛烈進学塾に入って、そこから偏差値的序列化を内面化させて以来、はや30年以上経ち、そのようなラットレース的な評価に、しんどいな、と感じつつも、そう評価されること自体は所与の前提というか、仕方がないこと、だと思い込んできた。大学院修了後、非常勤講師をしながら2年間で50の大学から不採用通知をもらったことや、博士論文提出時に論文や学会発表の少なさを批判された事がトラウマになり、常勤職に就いてからの15年間は、publish or perishではないけれど、仕事と遊びを切り離すことなく遮二無二インプットし、できる限りアウトプットし続けてきた。3年前に子どもを授かり、家事育児に必死になって、そのサイクルが崩壊した時は、文字通り自尊心が崩壊しそうだった。そして私は、様々な落ち込む事実に出会った時に、いとも簡単に「自分が不勉強だから」「読書量が足りないから」「英語を読むスピードが遅いから」「○○だから」と全て自己責任に落とし込んできた。そして、「もっと頑張らなければ」と、さらに歯を食いしばってきた…。

本書は、そういう私を宛先にギルさんが書いてくれた論文である。そして、もしかしたら、私と同じようなモヤモヤや苦しさを抱えている、学术界にいるあなたも、その宛先の一人かもしれない。限界ギリギリまで頑張っていて、それでも自分を責め続ける。これは、確かに自発的に自己統治をしているのであり、私たち研究者は新自由主義的主体の模範として機能しているのである。それは、中学校で「優等生」になってしまっていて以来30年、降りることが出来なかった、からこそ、疑うことの出来なかった、暗黙の前提としての規範として。

この論文が訳されるべきだ、と感じたのは、そのような研究者に深く内面化された、語られざる規範を言語化し、それがいかに新自由主義的規律権力と深く結びついているのか、を鮮やかに喝破しているからである。祝日の夜なんかに論文の後書きを書いている場合ではない！ そもそも、そ

れがおかしいと気付くべきだ。そして、気付いたら抵抗すべきだ。そう筆者は主張している。

私も深く同意する。だからこそ、この後書きはこれくらいにして、金輪際、なるべく祝日の夜まで働かないことを、自分に深く刻み込み、ここに宣言する。再帰性とか社会学用語をこねくり回す前に、まず自分自身の生き方こそ、反省して、振り返り、変えたい。私自身が自分の「隠された傷」と向き合い、沈黙を破るためにも！